

令和4年度 第56回 中学生の「税についての作文」

東京都主税局八王子都税事務所長賞

『フランス革命から分かる税のあり方』

町田市立成瀬台中学校 3学年 荻野 義広

私は、歴史の授業で「防人の歌」を学びました。この歌は、日本で行われていた税の残酷さが分かります。当時は労役も税の一種で、無理やり東国から九州へ行かなくてはなりませんでした。しかし、民衆が税によって苦しめられていたのは、古代の日本だけではありませんでした。その一つが、中世のフランスです。

当時のフランスは、貴族や聖職者が強い力を持っており、税は免除されてきました。当時は、その全てを貧しい民衆だけで負担していました。この不平等な仕組みを、解消しようとした人物がいました。その人物とは、後にフランス革命によって処刑される、ルイ十六世です。ルイ十六世と聞いて、悪いイメージを持つ人は多いと思いますが、実は国民思いの国王でした。貴族ばかりに富がいき、財政が悪化した中でも、民衆ではなく貴族などから、税を取ろうとしました。

一七七七年に、ルイ十六世はスイスの銀行家である、ネッケルを財務長官に抜擢しました。ネッケルは、財政立て直しのために改革を始めました。しかし、これに貴族たちは猛反発し、ネッケルを攻撃しました。これに対して、ネッケルは民衆に現在の状況を知ってもらうために、国家の歳入と歳出の内容を公表しました。これによ

り、歳出の約一割が王家に費やされていることが明らかになり、王家は強い批判を受けました。ルイ十六世はネッケルを罷免しましたが、民衆の圧倒的な後押しにより、七年後にネッケルは財務長官に復職しました。その翌年、ルイ十六世が再びネッケルを罷免してしまうと、民衆は激怒しました。この怒りは抑えようのないところまで達し、ついにフランス革命に発展しました。

私は、このフランス革命から当時の税には、三つの問題があったと思います。一つ目は、税の負担が不平等であることです。不平等であるために、不満が高まったのだと思います。二つ目は、税を何に使うかです。もしも民衆のために使っていたら、フランス革命は起こらなかったと思います。三つめは、歳入と歳出を公表し、それを改める仕組みがあるかどうかです。もしもあれば、前に挙げた問題点も解決すると思います。

古代の日本にも、同じような税の問題点があり、「防人の歌」のような悲劇が起こってしまったのだと思います。

私は、税についてもっと知らなくてはならないと思いました。なぜなら、税について知ること、その税の課題を見つけることができ、議論することでより良い仕組みにすることができるからです。これを、多くの人が行えば、今よりももっと良い社会になるのではないのでしょうか。フランス革命は、そのようなことを、教えてくれていると思います。